

川口市日本中国友好協会三〇年史

川口市日本中国友好協会



総会での岡村会長挨拶（2002年2月11日）

創立三十周年写真集



川口市日中創立当時の理事会



武大使婦人毛婭平参事官の講演（2004年2月11日）



第一回中国鑄物研修生、坂本支部長宅前（一九八七年）



第一九回川口親子教室（川口市立飯塚小学校）中国大使館訪問記念（貳〇〇四年七月）



第 11 回川口中国語教室研修会、国立オリンピック記念青少年センター

1991 年



2001 年度第 24 期生中国語教室入門 A 開講式

第 21 回中国語発表のつどい
(2000年10月15日)



第 18 回中国語発表のつどい
演劇倶楽部『わらしべ長者』
1997年



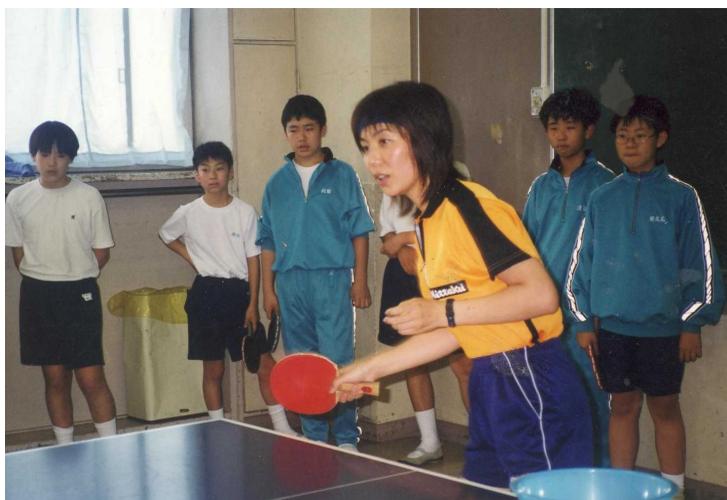
第 21 回中国語発表のつどい『画像妻子』(2000年)



貴州省松桃県決基川口友好小学開校式（2001年10月）



「たたら祭り」での餃子販売（1998年8月）



鄭慧萍プロコーチによる中学校卓球指導（2003年6月22日）



中国語教室懇親会、日光鬼怒川（2003年9月14日）



中国語教室忘年会、渦尾県会長も参加（2004年12月23日）



中国大使館で孫参事官、李一等書記官、郭二等書記官と打合せ（2005年4月20日）

川口市日本中国友好協会三〇年史

発刊に当たって

川口市日本中国友好協会 会長

川口市長

岡村幸四郎

このたび、川口市日本中国友好協会が創立三十周年を迎え、その記念誌が発刊されることは誠に喜ばしく、会長として大変うれしく思います。

先ず、創立以来本協会発展のために、ご支援賜った市内各種企業・団体の皆様に対し、衷心より御礼を申し上げます。また創立以来今日までご尽力された歴代の役員・会員の方々の御労苦に対して、深甚なる謝意を申し上げます。本協会は昭和四十八年（一九七三）九月一日、市内の産業会館にて、会員三十四名を持つて発会しました。爾来三十余年、社団法人日本中国友好協会、NPO法人埼玉県日本中国友好協会との連携のもと中国との友好親善活動に努めてきました。その間、中国人を講師としての中国語教室の開設をはじめ、たたら祭りでの中国研修生手作りの餃子販売、小学校親子教室のブローチによる中学校卓球部の指導、市民からの募金による貴州省銅仁地

区への「松桃決基・川口友好小学」の建設、パソコンクラブ、中国映画の鑑賞会など数多くの活動を積極的に展開して参りました。歴史認識や価値観の相互理解がますます必要とされる現在、中国との『文化交流』の一つとして、両国の友好親善のため、協会の一層の発展を念じております。今後とも引き続き、皆様の「ご支援」「ご協力」をお願いいたします。



祝 辞

社団法人 日本中国友好協会

会長 平山郁夫

このたび、川口市日本中国友好協会が創立三〇周年の輝かしい記念すべきときを迎え、記念行事の一環として本誌が発刊されましたことを心より喜び申し上げます。

一九七三年の創立以来今日まで幾多の困難を乗り越えて地域に対する日中友好の啓蒙、草の根的な友好運動に尽力されて来られた事は、私たち社団法人日本中国友好協会としては歴代会長、役員、会員の方々に敬意を表します。川口市日本中国友好協会は昔から独特の方法で数多くの行事に取り組み、

また真摯に、友好運動の大事さを認識した活動を意識して継続されていることは、日中友好親善推進の上からも大変有意義なことであります。

三〇年の歴史を区切りとして更に五〇年、一〇〇年と子々孫々まで継続され、輝やかな活動が続けらることを願って私の祝辞といたします。



目次

創立三十周年写真集

発刊に当たって

川口市日中友好協会会長 川口市長

祝 辞

社団法人 日本中国友好協会会長

岡村幸四郎
平山 郁夫

第一部

川口市日中の組織創り

- 1 草創の時代
- 2 日中国交正常化ついに実現

第二部

日中友好協会川口支部の結成

- 1 川口支部結成まで
- 2 友好活動の胎動
- 3 第一の困難時代
- 4 第二の困難時代
- 5 中国語教室の開設

第三部

中国語教室の運営

- 6 中国友好訪問団の派遣
- 7 川口市日中独自の友好訪問団派遣
- 8 中国語教室の中国語研修旅行

- 1 中国語教室の経営方針
- 2 受講生の募集に
- 3 教室一泊研修会
- 4 教室責任者の交替
- 5 教室機関紙『にいはお』発行
- 6 受講料と講師への謝礼
- 7 受講者が協会の会員になる
- 8 教室の運営上発生する問題点
- 9 年度別入門クラス受講者の推移

第四部

川口「たたら祭り」協賛参加

- 1 中国研修生と会員での水餃子実演販売

2 水餃子実演販売

第五部

川口親子教室の中国大使館友好訪問

1 市内小学校児童の中国大使館訪問

2 中国大使館友好訪問の逐年記録

第六部

川口海研会の設立に協会も協力

1 海研会の設立

2 一九八七年度（初期）海研会の会員名簿

第七部

その他の事業

1 創立以来実施した大きな行事

2 中国卓球プロコーチによる市立中学行卓球部活動への指導者派遣

3 コンピューター倶楽部

4 演劇クラブ

5 当協会の日本語教育の概要

6 中国山村地区（貴州）学校建設支援

あとがき

川口市日本中国友好協会副会長

坂本隆太郎

第一部 川口市日中の組織創り

■■■■■■

中華人民共和国の成立から
日中友好を願う人達の交流

■■■■■■



2005年2月11日

1 草創の時代

一九四九年十月一日、中華人民共和国が成立した。翌五〇年十月一日、全国本部の日本中国友好協会が創立された。戦後八年間中国東北地方で中国人民とともに生活し、一緒に仕事をしてきた坂本は、そのような組織が存在することなどまったく知らなかった。中国の生活のなかで坂本は、われわれ日本人は隣国の中国と仲良くし、共に発展しなければならない、と理屈では無く体で感じていたのである。そのように考えてきた坂本は、何かやらなければならないという使命のようなものが常々頭の中にあつた。

とはいえ、一九五三年に十三年振りで帰国した坂本にとって、まず生活の安定には就職が先決問題であつた。就職した経験もなかったが、軍隊以来携わつてきた経理事務を磨いて、その道で身を立てなくてはならないと考えた。

結局、周囲の反対を押し切つて、結婚したばかりの妻を実家に残した坂本は、義理の兄を頼つて上京した。改めて村田簿記学校の促成科で工業簿記・銀行簿記を学び、中央大学経理研究所を修了した後、四年近く日本橋の会計経理事務所で働いた。その後、義兄が経営する会社に入社し、経理業務一切を受け持つようになった。その間、自宅を川口市内に建て、仕事は東京、寝るのは川口という生活に入った。義兄が西川口駅前土地を持っていて、坂本がその管理をしていた。

たまたま川口市議会議員の選挙があり、管理している空き地を選挙事務所に借りたいとの問い合わせがあった。立候補者は五十嵐春治であった。初めて立候補した五十嵐は落選したが、それが縁となり、次第に五十嵐を通じて地域の人々との交流が始まった。満蒙義勇軍として中国にわたった五十嵐も戦前、戦後をとおして元満州にいたのだった。

中華人民共和国が成立して以来、日中友好を願う人たちの積極的な交流が、一般の人達にも影響を与えてきていた。川口では坂本や五十嵐をはじめ、石塚栄や、化学会社に勤務の鈴木などが集まり、グループ学習的な「中国問題研究会」が自然発生的にできてきたのである。続いて川口駅前の燃料研究所勤務の木村、蕨の化学会社勤務の松井なども加わった。このうちの数名はすでに埼玉県日本中国友好協会の直属会員として登録していた。

一九七一年九月大宮で埼玉日中第六回県大会が開かれ、坂本は参加した。

翌年三月の日比谷公会堂で開催された日中国交回復国民大会にも坂本は参加した。大会参加者は、約六千名といわれたが、そのうちの二団は銀座を通り、神田駅まで、即時国交回復をスローガンに叫びながらデモ行進をした。その中には埼玉日中より参加した多数の会員がいた。

大会に参加した坂本は川口に帰って早速、五十嵐・石塚・松井・鈴木・木村・鍋田などに呼びかけ並木公民館に集まった。日比谷での大会の状況を報告し、われわれも国交回復実現に全力を尽くそうと誓ったのである。

2 日中国交正常化ついに実現

一九七二年、日比谷での日中国交回復国民大会後も、川口有志の勉強会を月に一、二回程度開いて、時々刻々と変わり行く世界や国内日中関係の移り変わりをそれなりに学習していた。特に、一九七二年二月米国のニクソン大統領が中国訪問以来の急速な変化や、また国内での国民的な盛り上がり状況などを教材に学習してきた。われわれ一般国民でも、日中国交の回復は日を追って早くなるであろうと期待していたが、ついに田中内閣は中国訪問を決意し、九月二十五日訪中した。同月二十九日北京で共同声明に調印し、両国の国交正常化と外交関係樹立を正式に宣言した。この日の来るのを一日千秋の思いで待っていた多くの国民、特に協会会員にとっては正に待望の朗報であった。坂本のように、かつて戦後も中国で長期にわたって生活してきた者にとって、再び中国を訪問できるということは夢のようであった。坂本は留用（戦後中国政府に留められ、新中国を創るために働くこと）され働いた旧満州の鶴岡炭鉱から、全国に帰国した者たちと呼び掛け、組織を創って中国訪問を実現しようとしたが、ことは簡単にはいかなかった。その最大の原因は日本国内に妨害する者があり、各地で組織参加に異議を唱え、中国訪問ができないよう動いていたからである。続いて日中友好協会全国本部を通じて、訪中希望の請願書を中国大使館に提出したが、協会の下部組織でもない者に対しての請願書は認められなかった。この現実を味わった坂本は川口支部の組織創りに傾いていたのである。

第二部 日中友好協会川口支部の結成

……………
組織創りから
活動の始まり
……………



2001年2月11日

1 川口支部結成まで

日中友好協会埼玉県本部に直属会員として当時入会していたのは、松井・坂本ぐらいたが、坂本は組織的な活動には全然経験もなく県本部に入会していても、組織の重要性などあまり考えたこともなかった。しかし政治団体でもない民間の組織創りにも、横槍が入るのを知った坂本は慎重に支部創りを考え、松井や五十嵐に相談した。

その頃県本部のほうから、川口に「埼玉県日中友好体育懇話会」の副会長でもあり、県本部の副会長でもあったA氏を紹介された。A氏の会社の社長は「日中友好体育懇話会」県本部長であり、支部創りの話は比較的スムーズに進んだ。支部結成の前段階として、発足時の会員募集を話し合い、設立時期をなるべく早期にと、一九七三年九月頃と定め、それぞれ、会員の募集を始めた。もちろん坂本も今まで共に学習してきた人達と、会員募集に奔走した。A氏の勤める会社は、ほとんどがある団体の会員なので、かなりの人員を集められた。A氏が弁舌にたけていたこともある。その団体は会長以下が日中友好活動に力を注いでいた時でもあったから、A氏の集めた大部分の者はある団体の会員であった。それで準備が整ったので一九七三年九月一日に発足すると決めた。

発足式は川口駅前、産業会館五階の大広間で開催された。三十四名の川口支部会員と、来賓として、われわれの大先輩である県会議員の宮岡義一病院長と川口市議会議員の五十嵐春治（会員）、県本部よ

り桑木理事長が出席した。なお結成当日の来賓祝辞および祝電は次のとおりであった。

来賓祝辞

埼玉県議会議員

宮岡 義一

川口市会議員

五十嵐春治

日中友好協会 埼玉県本部理事長

桑木 健之

日中友好協会 浦和支部長

田村 茂樹

祝電

西園寺公一

衆議院議員 自民党 塩谷 一夫

衆議院議員 社会党 三宅 正一

参議院議員 社会党 田 英夫

日中友好体育懇話会 埼玉県本部

日中友好協会 上福岡支部

支部創立当時の役員は次のとおりである。

支部長 川上 勝治

副支部長 坂本隆太郎



2003年2月11日

事務局長 塩田 俊治
 県本部理事 松井 正雄
 会 計 足立 章
 会計監査 植田 潤一
 理 事 服部 戴明・石塚 栄・田口美智子
 鈴木 誠次・牧野 修・前畑 是延

当時の会費は次のとおりである

入 会 金	一〇〇円
県本部会費	一 一月 二〇〇円
支部会費	一 一月 一〇〇円
納付額は本人の希望により	三 三月 一〇〇〇円
	六 六月 一九〇〇円
	一 一年 三七〇〇円

創立式典が終了し、並木元町の労働金庫の近くの料理店で祝賀会を開催した。当時の大野元美川口市長より一人ひとりに若鷄の丸揚げを一羽ずつ頂き、祝杯をあげたことを参加した会員は今でもよく覚えている。



2002年12月23日 中国語教室忘年会

2 友好活動の胎動

支部とはいっても初めてなので、暗中模索の状態。県本部と連絡を取りながら、その指示に従い、かつ支部独自の活動を開始した。最初に取り組んだのは、会計監査役の植田潤一が「日本鍼灸師会」会員なので、月二〜三回程度、公民館や町会会館、または理解ある幼稚園などを借りて、鍼灸の宣伝と実際の鍼灸治療を始めたことである。鍼灸の宣伝は支部創立より一年前に始めていた。

国交正常化した一九七二年十一月二十二日午後六時半より川口市産業会館で映画・講演の夕べを開催した。西園寺一晃氏を講師に、中国映画『現在の中国と中国工業の紹介』を鑑賞し、「青春の中国」と題する講演会を開いたのである。今考えても良くやれたものと思えるが、そこは能弁なA氏の力にあずかったところが大きい。

漢方鍼灸相談室は同日十〜十七時まで、近くの友愛センター四階会議室を借りて開設した。支部活動は主に鍼灸治療が多かった。

このほか、中国理解の一つとして、中国から送られてくる雑誌の購読を市民に勧めた。われわれは『中国画報』と『人民中国誌』を主体に販売を拡張した。しかし地域一般の購読者は少なかつた。当然会員が率先して購読しそうなものだが、その会員ですらなかなか購読してくれなかつた。

3 第一の困難時代

一九七二年九月、北京において日中両国民に待望久しい「日中共同声明」が発表され、両国の国交正常化が実現し、日本国内における日中友好運動が次々と全国に沸き起こった。「松山バレエ団」の中国公演や「上海歌舞団」の日本公演、中国からパンダの贈呈、日本からオオヤマザクラの贈呈と矢継ぎ早の文化交流で日本国中が沸き上がった。

「中華人民共和国展覧会」が東京で一九七四年九月二十日より十月十日まで開催された。当時の支部長A氏は多くのある団体会員を帝国ホテルに招待した。東京で開催される「中華人民共和国展覧会」で新たな会社を興し、弁当などを会場で販売すれば確実に儲かると弁舌巧みな口振りで出資を勧めた。結果は多くの方々が出資に応じ、早速会社を創り具体化に入ったが、事は簡単に進まず予想を裏切り瞬く間に倒産した。

その後彼は別の詐欺事件を起こし、警察に追われる身となり、転々と住まいを変えて、会社の仕事はもちろん、協会の仕事も手につかず、支部の会議にも顔を見せなくなった。年末の三回の支部理事会にも出席しなかった。ついに一九七五年一月二日、県協会より村山理事長を迎え、緊急理事会を開き、協議の結果、本人不在であったが「除籍」することにした。そして、A氏が入会させたある団体の会員は全員支部を脱会した。六十数名いた支部会員もその後、坂本と石塚の両名で個別にあたって

調査したところ、残った会員は十五名程度になった。去って行った会員は入会申し込みなどしていなかった。A氏が無料で『中国画報』を送ったことよって会員として登録していたに過ぎない。これを機会にその後の入会は本人自筆の入会申込書を出してもらい、会員登録をするようにした。

4 第二の困難時代

一九七六年六月五日、当時の支部長・坂本が心筋梗塞の発作を起こし、市内の病院を救急車で回ったが、対応できる病院がなかった。夜の明けのを待って、千駄木の日本医科大学付属病院に入院、手術を前提に身体各部にわたっての検査。検査の結果、手術OKと診断された。入院最初は集中治療室に十五日間入れられた。その間面会禁止であったが、半月後一般病室に移動した。五十嵐、石塚たちが見舞い、業務連絡で病院を訪れる。これから心臓手術があり、その結果も不明なため、支部の件については五十嵐、石塚など理事が話し合って処理することにした。同年九月二日、同付属病院で心筋梗塞のバイパス手術を行い成功。経過がよいので入院期間は短いものと自他ともに考えていたが、手術一カ月後にC型肝炎発病。その治療に時間がかかり、ついに翌年一月末まで退院できなかったが、支部活動は各理事により運営されていた。

支部長入院中に中国では七月六日、朱徳全人代委員長が、ついで九月九日毛沢東首席が亡くなる。支部長退院と前後して会員の奥田利夫より支部活動資金として金五万円の寄付を受け取る。

5 中国語教室の開設

坂本支部長退院後、一年間は静養を覚悟していたが、回復が比較的早かった。川口支部は支部創立後、活動資金がほとんど皆無に等しかったので、坂本はこの寄付金五万円を資本にして支部の活動資金を作ることを考えていた。そこで浦和の津久井支部長と財政問題について話し合った。

大変参考になったのは中国語教室の開設であった。また彼の知人である川口の天津甘栗を取り扱う会社の専務である河野順一を紹介してもらった。早速、河野の会社を訪ね、教室開設についての指導と講師を依頼した。しかし、彼はこの件についてあまり積極的ではなかった。なぜならば以前九州福岡市で教室を開設したら、名古屋に転動させられた。名古屋で再び教室を開設したら、川口に飛ばされた。川口で開設したらどこに飛ばされるか分からないと冗談混じりに言ったが、開設一年後、正月休みで一人でいたところ心筋梗塞発作をおこし、誰にも看てもらえず、八〇年一月二日不帰の客とされた。夫人が九州に帰った留守の出来事である。まことに不思議で悲しくもあった。

迷信や宗教をあまり信じない坂本であったが、これには強くショックを受けた。河野順一より講師としての協力を得たので、福岡・名古屋での教室開設を参考に案を作り支部理事会に提案、結果全員の賛同を得た。募集広告をB4の用紙を使って印刷し、非合法ではあったが、夜間街路樹や電柱に、川口駅を中心にビラ貼りを行い、かつ同時に坂本が前年戸田日中主催の訪中団に参加した関係で、戸

田・蕨の訪中団員や他の友人、知人宛には手紙で案内した。十九名の受講生を得て、川口労働会館を会場に、第一期生の教室を一九七九年二月に開講した。

教室を開講したのは、中国語を学習することによって中国理解の一助になり、日中友好の意義を掴んでもらえることと、支部活動資金を得るためでもあった。収支をキチンとし、責任を持って教える方針で開講した。巷（ちまた）の中国語講座では月謝六百元・八百円という安価のものが多く、期間も三カ月・六カ月が多かった。川口支部では、期間は一年で、逐次上級に進めて、卒業なしとした。

入学金

一、〇〇〇円

受講料

(三カ月前納)

九、〇〇〇円

合計

(一括前納)

一〇、〇〇〇円

と受講料を決めた。

講師は河野のほか、彼の友人で麻布に住む、中島俊治(天津生まれ、日中共学の青島学院を卒業、以後北京同学会語学学校に入学。卒業後、北京中国大学を卒業、長く青島に在住)の二人に授業を受け持ってもらった。

開講して初めて気がついたが、受講生の世話をする者がいない。週一回だが休みなく毎回となると、支部の活動や運営にも支障が発生する。さらに同年九月にもう一組募集し、第二期生のクラスも作ったから週二回の世話役が必要となった。それで考えついたのが、毎年最初の入門クラスを終えた者の中から、活動できそうな受講者を支部に入会するように勧め、かつ、後から入って来る入門クラスの

世話役をしながら、無料で自分もさらに学習できるようにすると、大変よい結果を得たので、次々この方式を採用した。後年、県協会でも教室を開講したが、この方式を採用し、好結果を得た。さらに開講前は考えてもいかなかったが、教室から意識して協会会員として入会してもらったら、会員の増加と若返りに大きな効果が出たことは特筆すべきことであった。

川口の現会員の八五％は教室出身者である。また川口が成功した結果かもしれないが、川口で決定した世話役方式、講師に対する手当額などが標準になって、県内各地区に広まった。毎年『広報かわぐち』や地域の新聞などを通じて募集した。定員オーバーのこともあった。また中国語の学習歴により、本人に適したクラスに編入するなど便宜を計った。

そのことは上級になるに従い、受講人員の減少傾向がだいぶ緩和された。しかし最大の悩みは最初に掲げた「卒業なし」の結果、クラスが年々増加し、教室として借りられる公共的な部屋が少なく、やむなく定員（採算）割れのクラスは統合する方式に改めたのである。

6 中国友好訪問団の派遣

日中平和友好条約の締結が目前となってきた時、かねてから準備してきた、「第十一回日中友好協会埼玉県本部定期大会」が、一九七七年十一月六日、埼玉会館で開催された。県民に向けて早期に日中平和友好条約の締結を求めるアピールも発表された。

川口支部は県大会の方針を受けて、十一月十九日定期大会を開催し、会員は全力を挙げて平和条約の締結実現に取り組んだ。

国交正常化実現以来、日中友好協会を初め、他の友好団体はもちろん、政党、諸団体、地方自治体に至るまで中国訪問の希望が国内に漲（みなぎ）っていた。埼玉県本部として一九七六年十月十六日県内各界代表二十二名の友好訪中団を組織した（川口より中村時周参加）。この派遣以来、青年代表団として前畑是純・浜田克則を送り出した。浜田克則は続いて医療関係友好訪中団として訪問し、その後鍼灸治療・中国整体治療面で活躍している。



2002年6月 中国語教室研修旅行・兵馬傭（西安）

7 川口市日中独自の友好訪問団派遣

第一次 一九八〇年十月十四日河原銀之助を団長に二十名の「川口市各界友好訪中団」を派遣。最

初の予定では助役が団長であったが、大野市長の病気が急変したので、助役と副団長の斉藤増之助が参加を中止した。団員の動揺を防ぐため、秘書長の坂本に市の茨城秘書課長から、このまま出発し航空機に搭乗後、市長の病気と団長・副団長の中止理由を説明し、河原議員を団長に選び直して、中国旅行を続行して欲しいと要請された。成田より上海に向かう機中で団長・副団長の中止理由を説明、河原議員に団長を引き受けてもらい、友好訪問旅行を無事終えることができた。ただ、事前研修が無かったので、中国の現況に対する知識の不足から、友好訪問の趣旨にもとるようなことが多少発生した。上海→南京→揚州→天津→北京と革命後の中国をつぶさに見聞して帰国した。

第二次 一九八三年八月二日より七日まで。中国語教室を主体に友好訪中団十九名を北京に派遣。

教室関係者は習い覚えた中国語が実際にどれだけ通用するかの実験場となった。同時に海研会の幹部、(株)榎本鑄工所および(株)山崎鑄鉄工業の社長夫妻も同行したので、時の中国工業部長と連絡を取り、北京飯店にて会見、夕食を共にした。

第三次

一九八七年十月「埼玉県日中友好協会川口支部訪中団」を組織し、坂本を団長に十一名、北京へ太原へ開封へ鄭州へ上海へ蘇州を訪問。途中太原より鄭州に向かう線が長治市經由なので太行山脈の高原地帯を通過、そのために気温が急激に低下したが、その準備がされていなかったため、団員に多大な迷惑をかける結果になった。

第四次

一九八九年二月松本安弘県議を団長に十五名を組織し、川口市民友好訪中団」として派遣。香港へ桂林へ昆明へ成都へ上海と友好訪問した。成都訪問に際しては事前に連絡し、当時の四川省対外友好協会会長張恵明を意識的に松本団長に引き合わせ会談した。その結果、双方意気投合し、数年を経ずして市内新郷工業団地組合が中国人研修生を受け入れるまでに漕ぎ着けた。現在までも継続中であることは、友好訪問の大きな成果といえる。

第五次

一九九〇年九月には「埼玉県日中川口支部シルクロード友好訪問団」を組織し、十八日より二十九日まで、二十一名全員が初めて西域の地を訪問。解放された初期なので敦煌の石窟もほとんど制限なく鑑賞でき、団員は感激した。

帰国後、リアアの一階展示ホールを借り切って、リアア竣工祝いの一つとして「敦煌壁画展」を開催した。大きな現地模型を配置すると同時に、NHKテレビ放送の「シルクロード敦煌編」を会場にて放映し、鑑賞に来た市民に多大の影響と感銘を与えた。

第六次

一九九二年十月、団員十七名をもって十月二日より十一日まで、「三峡下りの訪中団」を派遣。時あたかも長江をせきとめ、大水力発電所建設の直前であった。上海↪重慶↪大足（比較的新しく発見・公表された石窟遺跡）と回って重慶より乗船し、三峡の壮大なる風景や沿線の豊都、万県、白帝城、瞿塘峡、巫峡、西陵峡の三峡を觀賞して宜昌にて下船、武漢・香港と経由し帰国した。

第七次

一九九三年十月二日より十一日まで。今までの川口支部を「川口市日本中国友好協会」と地区協会に改組創立した記念として、「黄山訪問団」を坂本理事長以下十七名で派遣。上海↪鎮江↪南京↪黄山↪杭州↪上海と回遊した。

第八次

一九九六年八月二十一日より二十五日まで。全国本部の平山会長の呼び掛けに応じ、「南京城壁保存修復川口市民訪中団」を募集した。十五名で訪中し夏の炎暑の中、世界遺産に登録された城壁の修復に従事、南京市より感謝された。

第九次

一九九七年二月、前川口市教育長であり、当協会の副会長であった栗原喜一郎を団長に、「貴州・雲南の友好訪問団」を組織し、十六名で訪中。最初、貴州省の省都・貴陽にて外事弁公室を表敬訪問、坂本の古い友人で副主任の李放鳴氏の計らいで丁寧なる歓迎会の接待を

第十次

受け、団員一同感激した。これが一つの縁となり、後年、省内の山村、苗族の農村に、小学校（三階建て）一校を贈呈することになった。経路は北京→成都→貴州→昆明→西路と航空機を乗り継ぎ、ビルマとの国境の町、瑞麗に向かった。途中、第二次大戦中米国が当時の蒋介石を援助するために作られた援蒋ルートを垣間見ながら、寶石で有名な瑞麗を訪問。ビルマ国内にも一日入国する許可を取っていたが、中国の少数民族・ジンボウ族と同一民族のカレン族が反乱を起こしたため、残念ながら直前になって中止となった。

一九九九年三月「福建省友好訪問団」を初めて福建に派遣。お茶と景色で有名な武夷山より省都・福州市、アモイ市（廈門）へと坂本以下団員七名で友好訪問。この地は昔から海外進出の気風盛んな地。日本にも最近特に多くの人たちが来日し、いろいろと問題発生も多いので福建人気質をつぶさに見て来たいということから訪問した。福建の人達は昔から、同胞がたくさん海外に進出しているので、海外に出ることは特殊なことではなくごく当たり前のことのように考えているのではないか。省都・福州市やアモイ市を訪問したが、他の省よりも綺麗で清潔感があり、特にアモイの空港も規模は小さいが清潔で、また海外で成功した陳嘉庚が寄付した小学校から大学・商船学校・水産学校まであるのには感激した。

第十一次 二〇〇〇年十月、小学校建設予定地の確認のため、坂本理事長と酒井事務局長が貴州省銅仁地区松桃苗族自治県を訪問。学校建設の詳細にわたって調査討議して帰国した。

第十二次 二〇〇一年十月栗原副会長を団長に、前記小学校の竣工に合わせて「貴州省松桃地区学校開設記念祝賀訪問団」九名を派遣、記念祝賀会に参列。新校舎は三階建て九教室、ほかに事務所や教員控え室等。入口正面右脇に岡村会長の直筆「為永久和平友好」の碑が大きな台座の上に建てられていた。

第十三次 二〇〇二年六月十六日～二十五日まで、中国語教室を主体とした「シルクロード友好訪問団」を派遣。団長は栗原副会長、団員数十九名。主な訪問地は西安～ウルムチ～トルファン～敦煌～西安と周遊して全員無事帰国。

第十四次 本年が埼玉県と山西省との友好県省を締結して二〇周年にあたるので、太原市において記念祝賀会を開催。川口市も土屋知事の呼び掛けに応じ二〇〇二年十月、岡村会長を団長に「埼玉・山西友好締結二〇周年記念祝賀訪問団」十八名を派遣した。太原市において両県省を通じて日中の友好の絆がさらに強まるよう、盛大な祝賀会が開催された。

第十五次 二〇〇四年六月二十五日より三十日まで、

岡村会長を団長に総員二十三名で「川口市
日本中国友好協会友好親善訪問団」を結成
し、北京へ開封へ鄭州へ洛陽を訪問。北京
では「中日友好協会」におられた駐日本国
大使の楊振亜先生以下二十名をご招待し、
王府飯店にて親善交流の宴を開き、胸襟を
開いて意義ある交流を行った。

8 中国語教室の中国語研修旅行

なるべく安い費用で中国を直接訪問し、中国の人々
とじかに接触し、日本で習得した中国語がどれだけ
通用するか実験してみること、中国の大地を直接五
体で感じ取ることは非常に大切である。一九八三年
八月、教室を主体とした中国旅行を実施して以来、
数回にわたり教室の訪中団を派遣してきている。

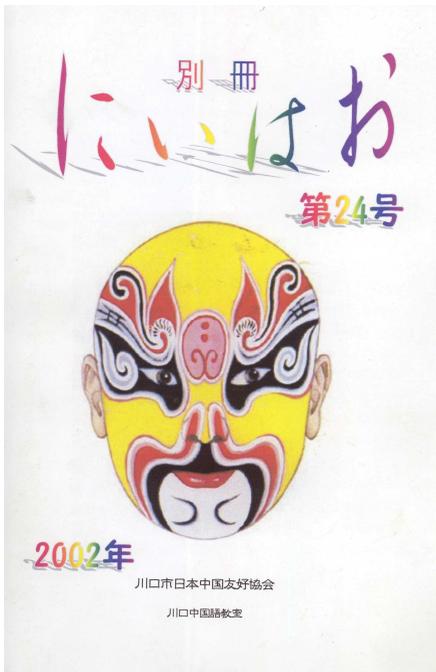


2005年6月 少林寺にて

第三部 中国語教室の運営



「楽しい中国語教室」をモットーに
日中の「友好の絆」作りを目指して



1 中国語教室の経営方針

先に川口中国語教室の設立について一部述べたが、当協会にとつて、中国語教室に参加した人達が会員になることは、財政基盤充実の面からも、もっとも重要な部門である。

成立は一九七九年二月一日。一般募集による最初の受講生は十九名であつた。同年九月五日第二期受講生を募集し十四名が集まり、初級クラスは二教室となつた。

経営方針として次の三点に重点を置いた。

これからの日中友好を進める上で、語学は相互理解を深めるため、もっとも必要であること。

川口支部の経済的弱体を考慮し、独立採算制を重要視し、あわせて協会の活動資金を得る。

中国を良く理解することにより、意識的に入会を勧め、会員の増加を計る。

当初は全然考えもしなかつたが、卒業なしで連綿と継続した結果、教室の数が増え新しく使用する教室が得がたくなつたことである。最初借用した労働会館の部屋も、年間を通じて指定した曜日を使うとなれば、二教室以上を借りることになり到底無理であつた。それで次にあつたのが駅に近い栄町公民館である。館長に事情を話し、ようやく一講座室を借りることができた。しかしそれでも年がかわれば新たに募集する受講生のための教室が必要になつてくる。加えて栄町公民館は駅に近く、地理的に大変便利なので、労働会館を使用していた前からの受講生が、駅に近い栄町公民館を使用した

いと言いつすのも無理からぬことである。

すでにその頃は受講生の中から、最初は山本孟人、続いて佐藤久夫をはじめ数名の受講生を世話役としてお願いしてきた。相当効果をあげていたので彼らと相談し、駅近くで使用できる部屋探しを常時進めてきた。町会の部屋や市の栄町青少年センター、幸町青少年センター、本町青少年センターや西川口公民館等々。いずれの場所にしても長期間指定の曜日を独占的に借用することはなかなか困難なことで、山本・佐藤の両名は常にそのことで頭を悩ませていた。

川口の中国語教室は設立以来「楽しい中国語教室」をモットーに、受講生・講師・主催者の三者による民主的運営を軸に、在日中国人・留学生・研修生との学習交流、宿泊研修、その他各種の交流により国際感覚を養つとともに日本と中国とのより強い「友好の絆」作りを目指してきた。

また、受講生への特典として、中国書籍の割引、中国映画の推薦・入場券の割引、埼玉県日中の主催する中国留学への推薦、中国本国の中国人との文通希望者の紹介、中国旅行の相談・斡旋、中国物産の特価斡旋、受講生同志の情報交換による各種割引等、最新の中国情報を随時的確に紹介してきた。

この中国語教室を長年にわたり支えてくれた特異な存在は、川口駅東口に洋服店を開業している最初からの会員・鈴木茂男とその家族であった。ここに、三年は最初の入門クラスの募集期日が四月からなので、新規入学期と重なり、スズキ洋服店の協力は得られないが、最初は二月が講座開始だったので、受講生の受付は地の利を得て、ほとんどスズキ洋服店の協力を得ていた。駅を利用するものはもちろん、市内循環バスの集散地なので、申込みが大変便利であった。スズキ洋服点側もさほど忙し

くない一月末までの募集なので、相当長期にわたって、毎年の年始めの募集受付を無報酬で担当してくれた。

2 受講生の募集

中国語教室を半永続的に経営することは決して楽ではなかった。まず受講生の募集についてであるが、最初は街中の街路樹や電柱等に募集広告を出したが、それは本意なので、地域新聞である「ふれあい朝日」等を通じて募集広告を出したが、あまり効果はなかった。それで市の広報課に頼み込んで「広報かわぐち」に掲載してもらったら効果覿面（てきめん）定員三十名に対して毎年定員以上の応募者があった。

しかし良い事ばかりあるわけではない。「広報かわぐち」で募集開始した最初の頃、内容に受講料の金額まで入れて広告を出した。確か教育局の某教育次長から掲載に対する意見が出された。「高い受講料をとって公民館活動をするのはもつてのほか」と言うのである。もっともな言い分ではあるが、協会は利益追従の団体でもなく、日中の友好を目的とする一市民団体であり、講師に対する謝礼金を捻出するためであると説明しても、頑として受け入れず困り果てた。しかし時の公民館長である谷口寿氏の内部からの働きかけによって、この難関を突破することができた。以後、市役所の「広報かわぐち」に掲載を依頼するときは、金額を一切入れないことにした。その後、「川口市日中友好協会」は川

口市より社会教育団体として認定され、使用上の便宜や使用料金の低廉化の適用を受けられるようになった。

3 教室の一泊研修会

教室で受講するばかりでなく、渋谷区にある「オリンピック記念青少年総合センター」で、受講生の気持ちを一新するため一九八一年より一泊研修会を開くことにした。時の世話役であった山本孟人と佐藤久夫などの努力によって申し込み、許可を得て開始した。一泊研修会とは単に受講生ばかりでなく、基本的には協会役員および希望する会員も含め、中国人講師と次期講師を希望する留学生若干名をふくめ、膝を交えて教えてもらう会である。多少のずれは仕方ないが、講師一に対して受講生三、四名が一組になり、翌日、中国語で発表する「自己紹介」について学習する会である。なお暇を利用して太極拳や胡弓の練習、中国の歌の練習、中国将棋等々の交流がなされた。研修会で決められた行事が終わった夜は宿舎に戻って、全員で祝杯をあげる。忌憚（きたん）のない思い思いの話し合いをすることは、日中の国籍を越えて親近感を得、友情を育てるうえでの貴重な時間となるのだった。

翌日は特に入門・初級者を中心に、一人ひとり登壇して中国語で自己紹介、その他の人は自分の意見を発表することにより、自信と度胸をつける。秋に開かれる埼玉県中の「中国語発表のつどい」や全国本部主催の「中国語弁論大会」に出場する上での良い体験となった。

4 教室総責任者の交代

教室の第二期生として参加した山本孟人は、半年足らずで教室の世話役として事務局員を任せられ、中島老師を助けてきた。第三期生として参加した佐藤久夫も協会に会員として加入し、続いて教室の事務局員として、先の山本と事務局を担い、発展のため努力してきた。しかし二人とも知恵と体を使い、良く活動したが教室の運営問題その他についてことごとく意見が相違し、絶えず争いが絶えなかった。そこで山本に県協会でも教室を開きたいと計画しているので、そちらに行つて川口方式で開いてくれるよう依頼した。後は佐藤久夫に任せることにした。

県協会で開設するとすると、大宮と浦和の両方とも必要になり、坂本は県協会の理事長でもあるので、山本と一緒に教室探しに奔走した。その結果、大宮駅西口付近に教室が借りられ、浦和の方では公民館や市民会館の借用可能を確認したので、開設の運びとなった。

川口の中国語教室は佐藤の努力によりますます発展し、彼が教室の総責任者から離れるまで、毎年「オリンピック記念青少年総合センター」での一泊研修会はずっと続けられて来た。

佐藤久夫が教室総責任者の任から離れてのち、菅原昭がその跡を継いだ。理事長の坂本は菅原がその任につく際、一言彼に伝えた。「前任の佐藤君はかなり広範囲にわたって教室行事をこなしてきた。君にそれを踏襲するよう望むのは無理なので、従来の良い点は踏襲し、あとは自分の殻に似合った穴

を掘って逐次進みなさい」と指示した。その結果、「オリンピック記念青少年総合センター」での一泊研修会は中止となった。その他、以前より後退した点が見受けられるが、坂本は何も言わずに彼に任せた。

5 教室の機関誌『いはお』の発行

川口市日中友好協会中国語教室の特長の一つとして、何事でも始めたらそれを継続することであった。市内の子供たちを連れて大使館を訪問するもその一つであるが、中国語教室で始めた機関誌『いはお』もその典型的なものだ。

最初に取り組んだのは一九八一年、これは教室で学習する受講生のつながりと親睦のためである。学習上の注意事項から新入門者の受講動機、講師や在籍者の紹介、先輩の受講経験等々。中国語や日本語でそれぞれ発表し、受講者全員に配布している。

以後、教室の責任者や役員の努力によって毎年一回発行し、現在まで二十五号の発行をみた。なお最近では個人のプライバシーを守る意味で、入門クラスから上級クラスに至る名簿は別冊とし、配布は必要最小限にとどめることにした。また協会内部の「コンピュータクラブ」新設に伴い、クラブ責任者・前田稔夫の協力により表紙・本文ともカラー印刷で写真も撮り入れ、見た目にも大変きれいで、内容の充実した教室の貴重な発行誌となっている。

6 受講料と講師への謝礼

中国語教室を開設するに際して一番考えたのは、講師への謝礼金の金額と受講料をどのように設定するかであった。県内などで開催している教室の受講料を調べたら、安いものは月額五百円、高くても千円を越えない額が多かった。しかしだからといって受講生が長続きしているとはいえない。坂本は考えた。得てして払い込み金額が少なく、途中でやめても惜しくないと思うのが普通の考えだ。かなりまとまった金額を払うとなれば、簡単に捨てられないのが人情だ。当時としては高額で、入金千円、受講料は三カ月分九千円、その後三カ月ごとに前納。したがって初回は一万円を納めなければならぬ。その代わり責任をもつて教えるし、こちらから「あなたはもう卒業ですよ」等とは決して言わない。また現実に私でさえ自分自身で日本語は立派に習得しましたとはいえず、生涯が学習だと思っている。受講者も本人が「これで十分だ」とやめない限り学習を続ける。当時講師料は二時間で六千円、特別上級クラスを教える講師には七千円を支給した。最初、講師は日本人であったが、初めの計画では中国留学生を対象として考えていた。中国の留学生は、当時大陸からの送金はなく、アルバイトで生活し、授業料を大学に払うので、それらの留学生の生活を支えるための金額を考えて算定したので。

受講料はその後改変し、今では月額四千円とした。三カ月分前納は変わらない。講師への謝礼は基

本的には以前と変わらない。一時間三千円ももらえるアルバイトなどあまりないだろう。

川口市日中で始めた中国語教室の受講料や講師に対する謝礼金が一つの見本として、県内各教室で定着しているようだ。しかしこれが果たして標準として良いか悪いかは、検討してみる価値があると思う。

7 受講生が協会の会員になる

川口市日中の特色のひとつは、教室受講者に協会入会を勧めることである。教室の開設以来、各クラスの担当世話役は「楽しい教室」をモットーに、先輩が必ず二、三人ついて中国人講師とともに受講のお世話や受講料の受け取り、休憩時のお茶、茶菓子まで準備した。地区協会の各種の活動・行事などを知らせ、月三回発行の協会全国紙『日本と中国』も最初の一年間は無料で提供した。機関紙の無料配布を考えたのは教室責任者の佐藤である。一年間の入門クラス修了とともに、協会会員として、あとから入る次の受講生の世話役として奉仕してもらうよう努力してきたので、会員の八割五分は教室より育った人達である。この世話役の積極性の有無が、入会の多少に、あるいは一泊研修会にどれだけ参加するか、協会の各種行事の一つ「たたら祭り」での水餃子実演販売への協力や、毎年秋ごろ実施する中国語の発表会（弁論大会を含む）に、どれだけ多く参加するかに現れるのである。

世話役の活動とともに大切なのは、中国人講師に対する意識改革である。比較的年配といってもほ

とんどの留学生は革命後の生まれで、祖国中国が、戦前の列強諸国によつて虐げられ、侮蔑され、日本の軍国主義者によつてもたらされた苦しさは歴史上では知っているが、体験的にはない人達。したがつて日中両国の友好増進がどれだけ必要なかは理解されてない点が少なくない。この中国語教室で語学を教えるとともに、両国の友好がなぜ必要なのか？その理解の上に立つて教えてくれるよう、われわれも機会をとらえては若い中国人講師に説明する必要がある。川口市日中では、意識して年間数回にわたつて話し合いを行っている。

川口市日中での年間を通じての語学習得の活動は、今後重要な柱の一つとして継続、発展させなくてはならない。

8 教室運営上の問題点

教室開設以来二十数年が経過したが、その間順調に経過したわけではない。資金と組織の問題点について触れてみよう。

資金

中国語を学習したいと応募する方も動機・考えはまちまちだ。中国語を学ぶ者はすべてが友好人士ではない。友好などはどうでもよい、語学だけ習いたいのだ」と言つる者も決して少なくない。

教室を運営し、役員・世話役が無料奉仕して友好活動を進める資金を作り出すのも、われわれ民間団体にはどこからも入って来る資金がないからである。必要な資金はわれわれ自身で稼ぎ出さなくてはならない。阿漕（あこぎ）な方法を講ずれば一遍に信用が無くなる。

坂本が教室を始めた大きな動機は、協会の活動資金が欲しいからで、資金なしでは極端に言えば何もできない。大阪の商売人と付き合っただけで知ったことは「汚く儲けて綺麗に使え」であった。中国人然り、中国の国内外をとわず爪に火を灯すような思いで資金を貯め、大きくお金を儲けて、その資金を故郷の地に還元する。たとえば福建省のアモイ市（廈門）の集美鎮に小中大学校から航海学校・水産学校まで建てて郷里の後輩が先輩を乗り越えて世界で活躍するように、膨大な資金を提供した「華僑・陳嘉庚」を見習い、資金の蓄積を始め、ようやく現在の川口市日中らしい協会ができたのである。しかし、受講生の中に、あるいは担当役員の中には、「教室で儲けた金は教室で使うべきだ。俺たちが儲けた金は俺たちのために使うべきだ」と考え、言い出す者も現れるようになった。

組織

川口の中国語教室はクラスも多くほとんど毎日どこかで、授業を開いている。中国語教室は地区協会の友好活動の一端を担う大切な事業である。しかし、自分の教室以外の地区協会の会員は毎日のように顔を合わせることはない。そのため、長く携わっていると独立王国と思うようにな

り、協会の上かまたは同等の立場にいるような錯覚に陥り、独断的な行動をとるようになりやすい。これは最も注意し、また警戒しなくてはならない。組織が破壊されるからだ。

中国語教室では世話役と受講生が最低週一回は顔を合わせる。それだけに親近感是他の会員などとは違う。それがあある面では小さく固まっついていき、ひいては蜜蜂の分封（ぶんぼう）ではないが、世話役が協会の方針が気に食わないから、あるいは責任者と反りが合わないからと担当教室の全員または大部分を連れて、講師ともども別行動をとるようなことが発生する場合もある。現にわが教室でも一度発生し、苦い経験を味わった。

9 年度別入門クラス受講者の推移

この表は入門クラスの受講者数で、このほか学習経験者は、該当するクラスに編入するように勧め、その数はこれに算入していない。二〇〇四年現在のクラスは入門A・B、初級A・B、中級A・B・C、上級A・B・Cの十クラス受講生は百五名である。

また、入門クラスの修了証書を発行し、本人に渡すためと、世話役や講師をねぎらうため、さらに教室の懇親会を兼ねて毎年十二月二十三日を教室の忘年会と決めた。平均参加人員は八十名前後で現在まで継続してきている。なお県協会の事務局長は毎回、会長は現在の渦尾会長になってから数回出席されている。

入門クラス受講者数

年	最初のみのクラス募集	この年より昼夜二クラス募集
一九七九年	三五名	一八名
一九八〇年	二四名	二二名
一九八一年	一九名	三五名
一九八二年	二六名	四一名
一九八三年	一五名	四〇名
一九八四年	三六名	三七名
一九八五年	一八名	二四名
一九八六年	一九名	三一名
一九八七年	一八名	二七名
一九八八年	三七名	一九名
一九八九年	二〇名	三八名
一九九〇年	二二名	四五名
一九九一年	三一名	三一名

第四部

川口「たたら祭り」に参加

中国研修生と会員による
年一度の川口名物
「旨い水餃子の店」誕生



1 中国衣料・食品・工芸品の販売

川口市の恒例行事「たたら祭り」は、一九七八年に第一回目の祭りを開催された。しかしわれわれの川口支部は当時まだまだ幼稚で、それに協賛し、参加するなどの考えはなかった。

一九八二年八月、青木運動公園を会場にした年に初めて参加した。その頃、将来われわれが『創立三〇年史』を創ろうなどと言う考えなど、毛頭皆無だった。確か山本会員の提案で中国の衣料などを公園に植えた樹木の間には天幕を張って販売した。まともには販売できれば、それなりの売り上げがあったであろうが、あいにくの雷雨で販売商品を濡らしてしまつて、売り物にならなくなった。仕方なくわれわれ自身で半値位の値段を付けて、購入したものだ。

第二回目は翌八三年十月、会場をオートレース場に移して開かれた。

その年は市内の鋳物業者の一部の方が、協同組合・川口海外鋳物研修生受入協議会を創り、二年越しの交渉がようやくまとまり、中国山東省煙台市から鋳物研修生二十五名が初めて川口に來た。そして坂本支部長のアパートに住まわせることになった。

そこで、鋳物研修生の生活用品の購入などの世話役をしてきた石塚と相談し、天津で有名な老舗の肉饅頭を「狗不理」(ゴウブリ)の名前で売り出した。しかし残念ながら肉饅頭は手間が掛かるし、蒸すのにも時間が掛かった。蒸籠を買い足したが足りず、蒸しあがったら近くの売店の店主などが待ち

構えていて、たちまち売切れてしまい、一般のお客様にはなかなか行き届かなかった。その他、天津甘栗・麻花・落花生・中国茶・中国工芸品などを販売した。八四年度は、適当な販売品が見つからないので参加中止。八五年は協賛出展したが割り当てられた場所が券売所の中通りのため、中国切手などの販売と協会の宣伝活動をするにとどめた。

その後八六、八七、八八、八九年と連続不参加となった。九〇年に一度参加したが、売上金額より、仕入額が多く、欠損金を出す始末であった。九一年は、「中国刺繍着物展」をリリアで、「馬成江書道展」はリリアと、寄居町日中の協力を得て寄居でも開催。そのため「たたら祭り」への参加は中止。

2 水餃子実演販売

それでも川口支部として「たたら祭り」への協賛参加はやめられず、九二年に川口海研会（川口海外鑄物研修生受入協議会）の協力を得て、改めて場所も表通りの現在の場所の割り当てを受け、華やかに川口名物「水餃子の店」として再出発を遂げたのである。

この現在地の指定を受けるには、海研会の方々の大きな努力のたまものであった。熱い餃子のゆで汁の排水に至極便利な場所をいただいた結果と、バスで訪れる市民の方々が最初に通過し、食欲をそそる餃子の香りをかいでもらい、一年一年と市民に認識された結果が成功を得たのである。それまでの苦節十年をめげずに頑張ってきた結果で、労せずして現在の盛況が実現したのではない。その年の

売上げは好調で、年一年と市民から存在を意識され、美味しいと定評を受け、ますます売上げが増加してきたのである。また当時の永瀬会長（市長）が大の水餃子好きで、水餃子だけ作るように八ッパをかけられたのも幸いしたのかも知れない。

以来、中国研修生との協同で「水餃子」専門の実演販売店として発展していった。

特に大阪で〇一五七の食中毒蔓延事件後、「たたら祭り」の会場でも、作りたて、ゆでたての水餃子なら間違いないとの考えからか、昼・夜の食事時にはお客が殺到し、作るのもゆでるのも間に合わないほどの売行きとなった。参加した会員はヘトヘトになったが嬉しい光景ではあった。このようなこともあって、事前に計画を立てる段階で、ある女性役員に夜の時間を延長すれば、まだまだ売れるが、こちらが疲れてしまうので、あまり高い計画目標を立てないようにと釘を刺された。

水餃子の本格販売を始めてから十年目に、中国研修生と川口市日中友好協会は市民権を得て、年一度ではあるがおいしい水餃子と定着し、評判をとることができた。この事業は協会の宣伝とまじめな中国研修生の存在を市民に認識させた一定の効果と、友好活動に貢献でき得るものである。

しかし問題がないわけではない。研修生の調理師が交代する度に、味が変わるので、事前に必ず試食会を開いて、味の調整をしないでほならない。中国の「一人っ子政策」と中国社会の変化によって、若い研修生のなかに餃子作り経験のない者が多くなった。餃子の皮作りのできない者が今後増加する状況が現れてきているのだ。

第五部

川口親子教室の中国大使館友好訪問

「日中友好は子々孫々まで」
をスローガンに子供の中国
理解の一助にと大使館訪問



1 市内小学児童の中国大使館訪問

日中友好運動に携わる人々のなかには、戦前から中国に、何らかのかかわりを持った者が多い。したがって年齢的に見た場合、自然老齢者が多いことは否（いな）めない。時代は日一日と未来に向かつて進んでいる。

日中両国の願いは「日中友好は子々孫々まで」である。しかし現実に運動に携わっている者の大部分は中老年が多い。このままの体制でいけば、遅かれ早かれ友好運動は先細りになる。

そこで川口市日中はささやかではあるが、市内小学校の児童に、せめて中国大使館を訪問させ、中国の雰囲気を通してでも体で感じてもらえれば、この中から何人か、何十人かの友好に関心を持つ人が生まれるであろう、と期待をもって大使館訪問を開始したのである。

われわれは日中友好の先覚者として、今後百年、二百年と友好を進めるため、より多くの広範な友好を大切に考える国民を育ててはならない。とにかく、坂本理事長は、まず理論抜きで両民族が触れ合うこと、五体で感じあうことが第一であるという信念を経験の中からつかんでいた。

また、たとえごく少数でも後継者を作らなければならぬ。そのためにわれわれは友好の種をまくのだ。まかない種は絶対に生えないからである。

一九八一年頃、国際交流に比較的熱心な理事である鳥海歓彦がいた。彼はカナダの一部にフランス

系ケベック人がおり、東京にその代表部があるのを知って、市内の児童たちを引率して代表部を訪問した。その体験が大変よかつたらしい。それを聞いた坂本が中国大使館訪問を考えた。翌年の一九八二年から大使館と打ち合わせた上、夏休みを利用して大使館訪問を開始した。途中天安門事件で前後二回、二〇〇〇、〇一年大使館の内部大改装のため二回、それに〇三年はSARSの件で予定した小学校校長から訪問中止の要請を受けて、計五回中止し、現在までに十九回訪問した。大使館訪問の印象は純真な子供ほど強いようだった。ある会員の児童は、大使館員との最後の印象が強く残り、握手した右手を大事にし、当日は風呂に入っても右手を使わず、洗わないで別れの握手の思い出を大事にしたそうである。

最初のころは中国大使館訪問希望者の募集を個人に頼り、市内各地から募集した。時には地域の子供会に呼び掛けて多数の児童を集めたこともある。しかしその欠点として、大使館に連れて行った子供たちが、大使館の中を駆け巡り秩序ある行動が取れなかつた。そこで、子供ばかりでなく保護者も同行するようにした。家庭に帰ってから、中国のニュースなどがテレビで放送された場合、親子で大使館訪問のことに併せて話し合いができるので、子供ばかりの訪問は中止した。代わりに学校別に募集し、かつ一校または二校に呼びかけ、最高バス二台で訪問し、当然親たちも同行してもらい、中国理解の一助とした。

中国大使館を訪問し、各人それなりの理解や影響を受けたことと思う。さらに理解を深め、固めるため、参加した児童と親たちも含めて、「訪問した感想」を文章にまとめていただき、「訪問文集」とし

て発行し、全員に玄関前で撮影した記念写真とともに進呈した。文集は一九八五年の第四回訪問より毎年発行し、一九九九年まで継続したが、担当者が児童の原稿を打ち直し、印刷・製本するのに大変な労力を費やすので、以後の訪問については発行を取りやめた。

大使館には、訪問の記録として「文集」と大きく伸ばした写真をパネルに貼って毎回贈呈した。

大使館の友好交流部の責任者であった大使夫人の王月琴参事官を初め、代々の大使夫人（友好交流部責任者）はこれを高く評価し、われわれを励ましてくれた。この事業は今後も継続し、辛抱強く友好の後継者を長い目で養成しなくてはならない。



2 中国大使館友好訪問の逐年記録

第一回	一九八二年七月二七日	小学校児童	五六名	第十五回	一九九七年八月六日	元郷小	五二名
第二回	一九八三年七月二五日	小学校児童	六三名	第十六回	一九九八年八月六日	上青木小	四八名
第三回	一九八四年七月二四日	小学校児童	四四名			本町小学校児童	三八名
第四回	一九八五年七月二五日	小学校児童	一〇六名			合 計	一〇六名
第五回	一九八六年七月二四日	小学校児童	一四七名			協 会	九名
第六回	一九八七年八月一九日	小学校児童	四〇名			合 計	九五名
第七回	一九八八年	大使館と日程合わず中止		第十七回	一九九九年八月七日	元郷南小	三四名
	一九八九年	天安門事件で訪問中止				舟戸小	三九名
第八回	一九九〇年七月二四日	青木中央小	一〇三名			協 会	十一名
第九回	一九九一年七月二四日	前川小	五七名			合 計	八四名
第十回	一九九二年七月二四日	東領家小	六三名			二〇〇〇年大使館工事のため中止	
第十一回	一九九三年七月二八日	並木小	一〇〇名			二〇〇一年大使館工事のため中止	
第十二回	一九九四年八月三日	樋の爪小	四六名	第十八回	二〇〇二年七月二五日	原町小	六〇名
第十三回	一九九五年八月三日	芝富士小	四九名			二〇〇三年飯仲小学校児童不都合で中止	
第十四回	一九九六年八月六日	上青木南小	三八名	第十九回	二〇〇四年七月二七日	飯仲小	四七名

第六部 川口海研会の設立に協会も協力

「海外鑄物研修生受入協議会」
発足から中国鑄物研修生の受入れ



1 海研会の設立

そもそも始まりは、一九八〇年十月市議会議員の河原銀之助を団長に初めて川口市より「川口市各界友好訪中団」二十名を派遣したことによる。行き先は上海→南京→揚州→天津→北京であった。当時鑄物組合の理事でもあった須崎社長も当然「友好訪中団」に参加し、各市では極力産業設備を重点的に視察した。しかし設備面や期待した製鉄用コークスも期待はあつたが、中国労働者を受け入れては？という中国訪問で得た感覚があつた。その後、この件で鑄物組合に提案したが、三十三対三で否決されてしまった。しかし世の中は面白いもので「捨てる神あれば拾う神あり」で、須崎社長に同調した人たちが勉強会を始めた。それが十数名の協議会となり、八一年六月十二日「海外鑄物研修生受入協議会（略称海研協）」の発足に発展し、現在の海研会となった。発足当時は、問題が国際的なことであり、皆目わからないことばかり、すべて手探り状態であったが、ことが中国との関係なので日中友好協会川口支部長の坂本にも参加してもらつた。実現するまでに三年ほどかかったが、その間、通産省の吉海鑄鍛造品課長や日本建設業協会の専務理事をしてきた杉下氏や松本元衆議院議員等その他多くの方々にも相談にのつていただき、知恵を拝借し牛歩のような歩みながら確実に進み、中国研修生受け入れ第一号として全国の業界の先駆けとなつた。

中国研修生の宿舎として借り入れることになつてきた市の産業文化会館の宿舎が途中で借用不能

となったが、坂本支部長が参加していた関係で、彼のアパートを提供してもらったので、私生活上の管理も大変助かった。

中国研修生を受け入れてから、いろいろなトラブルが発生したが、その間生活必需品の購入等について献身的に協力したのは石塚現副理事長であった。海研会の中国人研修生受け入れに伴い、海研会全員が協会に入会し法人会員として協会の発展に協力してくれたことは非常に大きな力であった。川口の名物行事である「たたら祭り」での協会の「水餃子販売」の実現も、海研会や研修生の協力によるところが大きい。このような活動を通して中国研修生とわが協会の存在が川口市の市民権を得る大きな土台の一つになったといえる。

2 一九八七年度（初期）海研会の会員名簿

伊藤鉄鋼	株式会社	代表者	伊藤長治郎	児玉鋳物	株式会社	代表者	児玉洋介
株式会社	池田鋳工場	代表者	池田七五郎	サトウ精工	株式会社	代表者	佐藤数雄
株式会社	榎本鋳工所	代表者	榎本真	株式会社	佐々木鋳工所	代表者	佐々木誠
株式会社	笠倉鋳工所	代表者	笠倉久昇	合資会社	島崎鋳工所	代表者	島崎信義
共立工業	株式会社	代表者	永瀬晃	株式会社	須崎鋳工所	代表者	須崎耕二
株式会社	第六鋳造	代表者	石井精次	株式会社	高津鋳工所	代表者	高津和三

株式会社	永瀬留十郎工場	代表者	永瀬留十郎
永井機械鑄造	株式会社	代表者	永井 稔
新関鑄工	株式会社	代表者	新関 安生
富士鑄造	株式会社	代表者	富田 誠子
有限会社	細金工場	代表者	細金 佑光
株式会社	増清鑄工所	代表者	増田 勝己
有限会社	丸安桜沢鑄工所	代表者	桜沢 光昭
株式会社	村田製作所	代表者	村田 光弘
合資会社	森鑄工所	代表者	森 啓介
有限会社	山崎鑄工所	代表者	山崎 生劭
吉田鑄造工業	株式会社	代表者	吉田 和男
株式会社	大熊商会	代表者	大熊 啓介



2003年12月23日 中国語教室忘年会

第七部
その他の事業



2002年8月 中国国立雑疑団川口公演



日本語教室の老師と生徒たち

1 創立以来実施してきた主な行事

中国開封少年雑技団川口公演

一九八九年十一月三日リリアにて開演。戸田市と中国河南省開封市は友好姉妹都市を締結、その縁で「開封の少年雑技団」を招請した。しかし県内各都市で公演するといつても、戸田市日中が主催することは不可能なので、埼玉県日中に相談が持ち込まれた。それで川口市日中は早速、県日中と連絡を取り、十一月三日川口リリアで公演する約束を取り付け、公演実現に向けて準備を開始した。戸田市日中は雑技団の宿泊場所として競艇場の近くにある武道館を提供。食事の世話は深谷市日中の高橋理事以下数名で担当、中国での食生活に近い食事を作ったので、少年団員たちの体調は良く、また毎日が県内の公演なので専用バスで往復した。その結果開封市も戸田市日中も県日中も、開催した県下各地の地区協会もすべてがうまくいった。

観覧した川口市民も少年雑技団のキビキビした行動に理屈ぬきで声援を送り、機会があれば再度の公演を要望した。

中国敦煌壁画展

一九九〇年十月十六日、二十日に開催。川口市日中は九〇年九月下旬にウルムチ経由で敦煌を訪問

した。まだその頃は敦煌訪問団は少なかった。初めて訪問したわが団員は莫高窟を參觀して非常に感
激した。ちよつどその頃全国本部に敦煌の壁画を模写した作品が到着していた。それを耳にした坂本
支部長は、支部理事会に壁画展の構想を提案して開催を求めたところ賛成を得たので、早速全国本部
と交渉し、壁画の貸し出しを要請、承諾を得た。次いでリリアと交渉して一階展示ホールの借用許可
を得て準備に取り掛かる。ただ、展示方法についてはまったくの素人なので、全国本部に専門家の紹
介を依頼し、国友俊太郎氏の紹介を得る。国友氏の自宅を訪問し、支部の現状から多額の報酬は支払
い不可能を前提に面接の上展示の指導を依頼し、快諾を得て、一切の配列をお願いした。

なお、台東区に敦煌の模型があるとの情報を得たので台東区役所を訪れ、担当者に直接面接し、借
用の交渉と保管場所（橋場小学校）を教わり、所定の日に佐川急便の大型貨物車でリリアに運び込
んでもらった。また、展示を盛り上げるため、NHKで放送したシルクロードの敦煌編を購入してい
たので、それを放映。期間中に来訪した市民は千名を超えた。なお、リリア側より後日、大変良い催
しを開いてくれたと、払込諸経費は翌年開催の「馬成江書道展」の経費と併せて全額払い戻してもら
ったので協会として大変助かった。

中国書家・馬成江書道展

一九九一年九月二十六日より三十日までリリア三階の展示ホールを借用して開催。事前に市民およ
び関係機関に鑑賞を要請していたので、期間中約六百名の方々が鑑賞に来られ、かつ作品を多数購入

していただいた。何分来日の航空運賃から作品の加工費や諸経費、本人の持ち帰り資金まで捻出しなくてはならないので、販売には力を入れた。なおこの「書道展」は寄居町日中友好協会も協賛していただいたので、十月四日より七日まで寄居駅前文化会館でも開催。

寄居町の場合は町民の希望に従い、その場で書いてあげたので、売り上げ収入はかなり増加し、赤字を出さずに完了した。

中国刺繍着物展示会

一九九一年六月二十一日～二十三日の三日間、リリアの和室大広間で開催。これは全国本部と連携し、刺繍着物専門取り扱い業者の要請を受けて開催。当日は市長・議長夫人や川口婦人会の多くの方々や、前年のミス川口・児玉桜さん、県本部からは新井会長夫妻をはじめ婦人会員多数の参加を得て、盛大にテープカットができた。なおこの会を盛り上げるため「茶道」の先生にも参加していただき、終日来場者のなかから希望者を招いて茶会を開いた。

日中国交正常化二〇周年記念日中友好音楽祭

一九九二年九月二十五日、在日中国歌舞団と支部理事の浅倉恵美子が関与する大正琴の「椎の実会」「緑会」と合同で、リリアの音楽ホールを使用して記念音楽祭を開催。支部役員や会員の努力によって、会場をほぼ満席にすることができた。

大黄河雑技団の川口公演

一九九三年九月八日、日中友好平和条約締結一五周年記念として、リリア大ホールにて「大黄河雑技団」の川口公演を開催した。入場者数は千七百名。

中国石炭工業大臣（部長）表敬訪問

一九九五年六月二十二日中国石炭工業部于洪恩部長夫妻が来訪、市長を表敬訪問。リリアにて川口市日中主催歓迎会を開く。

中国伝統芸術の饗宴

一九九八年十月一日に日中平和友好条約締結二〇周年記念事業として、会員無料招待の記念公演をリリア音楽ホールにて開催した。

河南省雑技団川口公演

一九九九年六月二十二日 三重県と友好省県関係にある河南省より、三重県日中が河南省雑技団を招聘（しょうへい）。旧浦和市や戸田市は鄭州市や開封市と友好姉妹都市関係もあり、毎年鄭州大学や開封市の河南大学には川口市より留学生を県協会より派遣している関係から「河南省雑技団」の県内公演を決定。川口市日中も早速これに応じ会員、役員を動員して入場券を販売。リリア大ホールで開

催し大きな成果をあげた。

貴州省に小学校

二〇〇〇年八月六日、会員・島田芳男氏は死去に際し遺言として中国貧困地区の学業を支援するため協会に五十万円を託された。川口市日中と比較的關係の深い李放鳴氏が中国大使館勤務で来日されていたことがきっかけになって、中国でも貧困地区の多い貴州省に小学校を建設寄付することに決まり、二〇〇一年二月の定期総会の席上これを発表し募金開始。

同年四月七日チャリティコンサートをリリア音楽ホールにて開催。第一回として建設基金百五十万円を貴州省外事弁公室に送金。一般募金は同年八月末をもって一応締め切る。第二回送金は二〇〇一年五月十五日百五十万円を貴州省外事弁公室宛て送金。

中国国立雑技団川口公演

二〇〇二年八月十八日リリアメインホールにて「中国国立雑技団」川口公演を開催。今回の川口公演はメインホールを使用するのと、相手が国立雑技団で出演料も高額なので、困難は覚悟の上で役員、会員一致協力し、チケットの販売に力を注いだ。開催費用は三百五十万円の予定なので剰余金が出たら、学校建設資金に回す予定で取り組んだ。

四川劇『白蛇伝』公演

二〇〇三年十一月一日、四川劇団『白蛇伝』変面劇を川口市市民会館で昼夜二回の公演。入場者総数千五百五十名。収益金は学校建設基金や中国東北部チチハルでの旧日本軍遺棄による毒ガス被害者への見舞金などに繰り入れ使用。

2 山西省出身者プロコーチによる

中学校卓球部活動への指導者派遣

「ピンポン外交」それは日本と中国との国交回復以前に行われた卓球による国際親善交流だった。卓球が日中友好親善に、ひいては国交回復に大きく貢献したと、とらえられている。

国と国との親善を深めるには、種々な方法が考えられるが、頭に浮かぶのは二つである。その一つは「言葉を知ること」、もう一つは「ふれあい活動を進めること」である。ふれあい活動でも若いときから始めることによって、より一層友好親善は深められると思う。また、交流には文化、スポーツなど様々な方法が考えられる。その一つを選んで、中学校卓球部活動に中国出身者のプロコーチを派遣することにした。それは、たまたま川口市内に卓球プロコーチが在住していたので実現できたのである。

福原愛ちゃんのコーチで、日本と中国を一緒に往復し

て卓球で活躍している高林慧（鄭慧萍）さんである。彼女は中国山西省太原生まれで、七歳から卓球を始めた。十一歳で山西省代表チームに、十六歳で中国代表チームに選ばれた。五年間の選手生活の後、一九八八年に中国卓球連盟の派遣選手兼コーチとして来日した。

。来日後は

実業団の選手として活躍し、全国大会で優勝したキャリアの持ち主である。その後大学の卓球部などを指導し、優勝に導くなどの実績が認められ、プロコーチ（現在日本卓球協会公認のレジスタード・プロコーチ）となった。

二〇〇一年から希望・要請する川口市立中学校で指導することになり、以来、五年目を迎え、二 五年も六校の指導に当たっている。川口市日中としても、これの円滑実施と成果をあげることを願い、二、三名の担当者が同行し、それを見守ることにした。最初、生徒は緊張のためか話しかけにもあまり答えず、挨拶の声も小さく、質問する生徒も少なく、元気がないように見えた。二年、



2003年6月 在家中での卓球指導

三年と引き続き実施していくに伴い、最初と雰囲気が変わってきた、積極的に質問し、元気になってきた。「にいはお」と呼びかけに「にいはお」と応えるようになってきた。

この活動は単に卓球の技術力を高めるためのばかりではない。中学生の頃から外国人と接し、スポーツを通して交流し、国際親善理解教育に貢献したいことが「ねらい」である。

日本の中学生に人気がある福原愛ちゃんのコーチとしても活躍している高林さんの人柄と指導力も、この活動の成功の大きな要因であったと思う。

中国でも人気がある愛ちゃんもすでに高校生。「彼女に試合で勝つのが私の夢」と言う市内高校の卓球選手もいるとのこと、この活動を高校にも拡大することも考えている。

3 コンピュータクラブ

一九九七年四月 クラブ開設準備会

「コンピュータ倶楽部」開設準備委員として、尾上歩・市東文子・堀晋・本多路子・浅倉恵美子・前田稔夫・酒井雄市が集まった。各自の希望するものには多少のずれがあったが、いずれもコンピュータを使つての作業を希望していたのですぐ相談はまとまった。

前田・尾上はクラブを作つてコンピュータを教えながら、ホームページの立ち上げをする。市東・堀・本多はコンピュータの操作を習いたい、町の教室ではとてもついていけないの

でゆっくりと教えてくれる塾形式を希望。浅倉はお父さんが勉強したいと言っている、等々いろいろな希望をまとめて立ち上げる。

六月八日「コンピュータ倶楽部」開設準備会を開き、会則・活動計画案・予算案を作成し助成金申請等、六月十五日理事会での審議に備える。

クラブ開設の承認

六月十五日、川口市日中の理事会にはかり、年内にホームページを立ち上げるという条件付きで協会に所属する「コンピュータ倶楽部」の開設と、コンピュータ購入資金の借入りが承認された。

第1回例会

発足時部員十六名。尾上歩・小林英明・酒井雄市・市東文子・互章・永井研一・堀晋・本多路子・前田稔夫・本多俊司・李洪勲・魯青・岩田政活・坂本隆太郎・大山袈裟俊・浅倉登。

早速六月二十二日、第一回コンピュータ倶楽部例会を開き、六月二十九日までにコンピュータを購入し、すぐ使えるようにセットする。

六月二十九日以降の倶楽部は尾上歩がインストラクターとして指導する。

七月三日、川口市にあったプロバイダー、ピースワンと契約しインターネットに接続した。

当時、ホームページを開設している日中友好協会は大阪市日中と新潟県日中だけだったが、川口市日中は十月に三十ページにおよぶホームページを立ち上げた。

定例部会は毎月第二・第四日曜日午後一時三十分より五時ごろまでの開部。月会費 五百円

初年度役員

顧問 永井研一 副部長 本多路子・酒井雄市
部長 前田稔夫 会計 市東文子

会計監査 木村一男・堀 晋

一九九九年

開部以来すでに丸二年が過ぎた。しかし成果としては、ワード、エクセルの使い方が少し分かってきた程度、ホームページはまだ三回しか書き替えてない。情報収集の最先端インターネットに接続しているにもかかわらず、現在ホームページを作成できる人が何人いますか？

本年度の第一目標はメールを使いこなすこと。そのために全員がメールアドレスを取得し、会員相互にメールのやり取りをして、テキストのメールだけではなく、写真を送ったり、圧縮した大きなサイズのメールをやり取りできるようにする。

第二目標は会員全員が自分のホームページを制作する。川口市日中のホームページの容量は三十メガバイトと大きく、会員全員が二〜三ページの自分専用のホームページを持てるだけの余裕があるので、全員が参加する。

第三目標としてワード、エクセルを使いこなせるようにする。また、これらを使いこなして

いる部員に、希望するソフトを全員で相談し部費にて購入。

第四目標としてコンピュータの接続をISDN回線にする。

通信回線の整備とプロバイダーの変更

九月の理事会で承認された通信回線の整備完了。ISDNの導入。

ピースワン（プロバイダー）側が十月三十日で撤退との申し入れがあったので、プロバイダーを変更して接続料金・四時間の通話料込み九八〇円のOCN（NTT）と契約した。

『にはお』編集に協力。部員数十七名

二〇〇〇年

川口市日中コンピュータクラブは、川口市日中の活動、川口中国語教室の活動、および中国に対する援助、友好活動の報告、募金活動などの広報活動の一助を担うため部内に専任部門を作り、協会ホームページのサイトを迅速・有効に管理する。

初歩の会員にはコンピュータ取り扱いの基礎指導、アプリケーションソフトの使用法、コンピュータの用語説明などを随時行う。

今年度の定例クラブ活動は毎月第二、第四、第五日曜日午後一時三十分よりとする。インターネットプロバイダーはNTTの運営するOCNを使用してクラブを運営する。クラブ員の増強を進める。副部長 酒井雄市が退部。

『にはお』編集に協力。部員数十七名

二〇〇二年

会 計 市東文子退部 新会計 井上不三子

部費一括納入に対する割引制度

会費は年間四期に分け、一期ずつの納金で一回三千円ずつ年間一万二千円になっているが、年間一括納入の場合は年一万円に割り引く。

ルータ を使用した複数機器のネット接続を実現した。

コンピュータをOCNよりリースにて借入れ、また、プロバイダーアクセス料金を通話料込みで契約したので、部費による全費用決済が実現した。

『いはお』編集に協力 部員数十七名

二〇〇三年

ホームページに写真置き場を追加、協会員は催事の記録写真を閲覧でき、必要な写真は各自がダウンロードしてプリントできる。

『いはお』編集に協力 部員数十五名

二〇〇四年

ホームページ書き換えは四回目を数える。

『いはお』編集に協力 部員数十六名

4 演劇クラブ

当時中級Aクラスであった、波多野、浅倉、堀内、浜崎たちは、教科書を勉強するよりも、もっと速戦的な、会話力を養うのには何が良いかという発想から、演劇に目を向け、脚本を創って翻訳、さらに演じることによって、会話に表現力を持たせようとこの演劇クラブを計画した。

● 初演

一九八九年 十月二十二日に浦和の埼玉会館で開催された、第一〇回埼玉県中国語弁論大会で当教室中級クラス（浅倉、堀内、内野、佐藤、浜崎、波多野、今井の七名）の演じた『寒流はどこから来るの』が団体の部で戸田市長賞を得た。

一九九〇年 本年より上級クラスの波多野篤、浅倉恵美子、市村静枝、内野繁子が主体となり、演劇クラブが形を作り始めた。

この年、県大会では『遠山金四郎』を演じ大好評を博した。

一九九一年 浦和市長賞、資料欠落により演題不明

一九九二年 十月三日 浦和市民会館 第一三回中国語発表の集いでは『白蛇伝』を公演

解説・浅倉 背景・金子 白素貞・浜崎 小青・田中 許仙・今井 法海・

波多野 小和尚・内野

一九九三年 浦和市長賞

資料欠落により演題不明

一九九四年

『白雪姫』川口市長賞

佐藤久夫の尽力により、この年から全国中国語弁論大会審査時間に特別ゲスト出演を
するようになった。この年は『白雪姫』を演ずる。

一九九五年

『美女と野獣』川口市長賞

(田中、浅倉、前田、尾上、今井、市村、佐藤、安藤、波多野)

全国本部弁論大会に特別ゲスト出演

一九九六年

『一休さん』埼玉国際交流協会会長賞

全国本部弁論大会に特別ゲスト出演

一九九七年

『わらしべ長者』埼玉県知事賞

全国本部弁論大会に特別ゲスト出演

一九九八年

『おむすびコロリン』国際交流協会賞

一九九九年

『水戸黄門』川口市長賞 (黄門・大山袈裟俊 助さん・田中慶紀 格さん・尾

上あゆみ くのいち・田中君子 団子屋の女将・浅倉恵美子 悪代官・波多野

篤 村娘・本多路子、市東文字、佐藤昌子 越後屋・前田稔夫 中国人・黄)

全国本部弁論大会で特別ゲスト出演

二〇〇〇年 十月十五日 中国語発表のつどい発表作品『画像妻子』

出演（小川、尾上、市村、白井、田中、波多野、田中、篠崎、内野、大山）

『妙医妙薬』この年、県日中より、後進に道を開くため、川口市の団体は本年より審査の対象から外すと申し入れがあった。川口前川中国語カラオケクラブと共に、全国本部弁論大会に特別ゲスト出演をした。

二〇〇一年 『最新のニュース』『漫談波多野・前田』 審査の対象外川口前川中国語カラオケクラブとともに、全国本部弁論大会に特別ゲスト出演をした。

二〇〇二年 『狼少年』川口前川中国語カラオケクラブとともに、全国本部弁論大会に特別ゲスト出演をした。

演劇クラブ部長・波多野は上海方面への出張が多くなった。また一九九五年より参加の尾上歩も、主婦業と仕事で多忙をきわめ、脚本・翻訳の時間を取ることが困難となったため現在休演している。



5 当協会の日本語教育の概要

一九八〇年ごろより中国残留日本人およびその配偶者や子女たちが、日本政府の重い腰をたたいた日本国民の関係者の運動によつて祖国に帰ってきた。この川口にも東京に近いという関係か、これらの帰国者が急速に増加してきたのである。同時に八三年を皮切りに、海研会が招請した鑄物研修生が来日し、これらの中国人に日本語を教える必要に迫られて、故渡辺欣哉理事をはじめとする数人の会員が教育の任に当たった。その中で平山は定年退職後、日本語教師の資格を取っていたので、協会の日本語教育について指名される機会が多くなった。

鑄物研修生に対する日本語指導

第一次研修生 一九八三年～八五年。中国で日本語をしっかりと学習してきたので、特に日本語の指導は行わなかったが、第二次以降は日本語の指導を行うようになった。

当時入国管理局の規定は、「研修生の在日労働期間内で、生活に必要な日本語教育を行うこと」であった。それで青木運動公園に隣接した通称シルバー人材センター二階の公園側教室を使い、授業日は月曜と土曜、授業時間は午後七時より九時まで、下記の当協会のメンバーが日本語の指導を担当した。教科書は中国人民教育出版社の『中日交流標準日本語』初級を使用した。この授業は研修生が日本に

いる間、毎週二回、二年間行われた。

第二次研修生 一九八五年九月～八七年九月。人員三〇名。担当は渡辺欣哉と小林英明。

第三次研修生 一九八七年九月～八九年九月。人員三〇名。担当は渡辺欣哉と小林英明。

第四次研修生 一九八九年九月～九一年九月。人員四〇名。二クラス。担当はAクラス渡辺欣哉、

Bクラス小林英明と浅倉恵美子。

第五次研修生 一九九一年九月～九三年九月。人員八〇名。三クラス。担当はAクラス渡辺欣哉と

内野繁子、Bクラス小林英明と浅倉恵美子、Cクラス平山安次と井上不二子。

第六次研修生 一九九三年九月～九五年九月。人員八〇名。三クラス。担当は第五次と同じ。

第七次研修生 一九九四年～九五年。人員二五名。Dクラスを増設し、担当は太田原（協会外）と

行名則子。

第四次研修生よりークラスに二人の教師を配し、一人は月曜、一人は土曜日を担当。一九九五年以降は、協会の教師は種々の理由からこの日本語指導から退き、プロの教師に指導を任せ、そのまま現在に至っている。

小中学生に対する日本語教育

一九九三年五月より、川口市教育委員会は、市内在住の外国人子女の増加に伴い、青少年会館で日本語補充教室を開いた。その後、元保健所の建物に場所を移した。酒井雄市は当初より、平山は翌年、

九四年五月より指導教師として参加した。

指導日は毎週水曜日と金曜日で年間五十回（予算の関係）、時間は午後三時より五時までであった。年間五十回は平均すれば週一回の計算で、あまりにも少なく、もう少し何とかしようとして酒井・平山で相談し、一九九七年より当時小学校の休日であった第二、第四の土曜日を利用し、協会事務所を使って中国人子女を対象にした日本語教室を開いた。時間は九時半より十一時半までの二時間である。当初、生徒数は五、六名で先生として応援に来てくれた中国語教室の人達も何人かいて、なかなか賑やかだったが、半年ほど過ぎた頃より段々と人が少なくなつた。しかし熱心に通つてくる中学生が三人ほどいたので、後半は平山一人で対応した。

ここで教えていたのは、主に学校の国語と国語の問題集であつた。日本の国語の教科書が読めない、意味がわからないという生徒のために、教科書をコピーし、漢字に仮名をつけ、欄外に中国語の訳文を書き、問題集は訳を付けて、それをさらにコピーして生徒に渡した。しかし種々の理由により一九九八年末でこの教室を閉じた。

中国人成人に対する日本語教育

一九九八年十一月、協会事務所平山が中学生に日本語を教えているとき、突然中国人の大人が三人入ってきて、真剣な顔つきで、「日本語を教えてください」と言う。当時、川口市内には、すでにボランティアの日本語教室が数か所あり、市内在住の中国人が増加している時なので、当協会も何かし

なければと考えていた。彼は即座に了承し、次週の土曜日から始めることを伝えた後、坂本理事長と佐藤事務局長に連絡を取り、承諾を得て十一月二十一日より、協会の日本語教室を開いた。

初日来た生徒は五名。教科書はスリーエーネットワーク社の『新日本語の基礎』を使い、時間は九時半より十一時半までの二時間である。一九九九年三月より授業日を日曜日に変更して現在に至っているが、その間、当教室に顔を出した中国人は四十名。最も生徒数の多い日は教室が一杯になる十六名で、生徒がたった一人という日もあった。二〇〇五年四月現在の生徒数は九名。出身地は天津・上海・昆明・牡丹江・丹東・黒龍江省等多様である。生徒の授業料は無料で、教師もボランティア。楽しい教室をモットーに、今後もこの教室を続けるつもりである。

埼玉異業種技術交流協同組合の研修生に対する日本語教育

二〇〇〇年九月埼玉異業種技術交流協同組合が十三名の中国研修生を受け入れた。それに対する日本語の指導を当協会の酒井事務局長に依頼してきたのでそれに対応することにした。入国管理局の方針も以前と異なり、研修生の在日労働期間は三年。それに来日後はすぐ集中的に日本語教育をするように指導があったので、教育期間は約三カ月、日曜祭日を除き毎日六時間、教師は午前と午後を交替で受け持った。教室は本町一丁目の労働会館、教科書は国際研修協力機構発行の『外国人研修者のための日本語 生活基礎編』を使用した。

第一次研修生
十三名

教育期間
二〇〇〇年九月十二日～〇一年二月二十日

担当教師
平山安次・深沢みさを《協会外》嶋村弘美

第二次研修生
十七名

教育期間
二〇〇一年九月十一日～十二月三日

担当教師
平山安次・深沢みさを《協会外》嶋村弘美

第三次研修生
九名

教育期間
二〇〇二年九月十八日～十一月三十日

担当教師
平山安次・深沢みさを《協会外》嶋村弘美・渡辺健作・韓冬黎

第四次研修生
十五名

教育期間
二〇〇三年九月十七日～十一月二十九日

担当教師
平山安次・深沢みさを《協会外》渡辺健作・韓冬黎・楊鳳秋

第五次研修生
十九名

教育期間
二〇〇五年二月二十六日～四月二十一日

担当教師
田上昭二・高山徹・内山良徳

この研修生は、今後も毎年日本に来る予定なので、この日本語指導も当然続くものと思われる。

6 中国山村地区（貴州）学校建設支援

先に県日中の呼びかけに応じて、山西省の山村地区・榆社県白北郷に小学校を一校建設贈呈する募金活動を会員および市民や、広く縁故ある県民に呼び掛け、四十六万二千円を県協会に届けた。その後、建設完了した小学校を見届けるため一九九七年九月訪中団に参加して確認した。小学児童や親達
が非常に喜んでくれた感激は今でも忘れられない思い出である。

一九九七年二月、栗原理事長を団長に貴州・雲南を訪問した際、大変お世話になった李放鳴氏が大使館勤務で来日、川口市日中では歓迎会等開いて旧交を暖めた。そのような関係から、わが川口市日中でも自然貴州省に親近感を持つようになった。その後中国では貧困省の多い西部開発計画を発表し、それらの各省を重点的に開発するとの大号令を発した。わが川口市日中でも今回は自力単独で、経済的に恵まれない貴州省の山村地区に小学校を一校贈呈する案が持ち上がり、広く市民や関係ある県民に募金を呼び掛けた。

貴州省より学校建設予定地の推薦があった。場所は銅仁地区松桃県決基村苗族小学校。それで坂本理事長と酒井事務局長の両名で現地視察のため二〇〇一年十月八日予定地区小学校を訪問した。現地は標高千メートルほどの所にある山村で、小高い丘の上に建てられた木造校舎だった。驚いたのは二階建てではあるがこわれて壁も窓もない校舎、その上二階の床は隙間だらけで、児童の靴に付いてき

た泥土が乾燥すれば、一階の児童の上に落ちていく始末。これしかないからここで勉強していると思
うが、本当に見るに見兼ねる状態だ。県・村の幹部と話し合いに入ったが、計画によると建築費用が
日本円で六百万円以上の予定とか。しかし私どもは総額で三百万円しか出せない、はつきりと伝え
た。

この視察に基づいて、帰国後ただちに実情を訴えて急遽（きゅうきょ）、具体的に後半の募金活動に
入った。現地からの報告によるとすでに学校建設に取り掛かったというので、募金の結末を見ないで
第一回の送金として、一年二月に、第二回目として同年五月それぞれ百五十万円ずつ送金、一般募
金は同年八月末で一応締め切った。

現地貴州省より、ほぼ小学校の建設も終わりに近付いたので、竣工式にぜひ来てほしいとの要請が
あり、同年十月九日より十五日まで、栗原理事長を団長に訪問団九名訪問。華やかな学校開設式典に
参加した。新しい学校は、旧校舎と少し離れた小高い丘を削って正面階段を付けた三階建てで、煉瓦
作りの素晴らしい校舎。しかし教室に持ち込んだ机や椅子は旧校舎で使用したあまりにも似合わない
オンボロ。同行した李放鳴一等書記官に、新しく椅子と机を作ったら幾ら掛かるか問い合わせると日
本円で五十万円以内で可能というので、栗原と坂本が二十五万円ずつ出し合い、至急新品の椅子と机
を整備するようにと、その場で李放鳴氏を通じて寄付した。今後は川口市内の学校と文化交流を重ね、
相互理解を増進しなくてはならない。

あとがき

日本と中国は、歴史的にも地理的にも一衣帯水の関係にあり、切っても切れない絆で結ばれるといわれるが、その背景には昔も今も多彩な人間ドラマが秘められています。最近の歴史を見るに、日本は五族共和といいながら、満州を侵略し開拓団や満蒙開拓青少年義勇軍と称して、屯田兵的な任務を背負わされた若者を派遣し、盧溝橋事件を機に中国本土への侵略も開始しました。日本敗戦により邦人は大部分引き上げたが、満州は軍民ともに多人数であつたために取り残された者も多く、その上、国内戦争勃発のためさらに長期留用されたものも少なくありません。

私が県日中の理事長をしていた、二年夏ごろのある日、全国本部は『日中友好運動五〇年史』を発行しました。それに刺激されてか、埼玉県日中も『五〇年史』の発行を考えたかどうか？という雰囲気が出てきたので、責任者として現理事長の中崎氏を選んで、取り組んでもらいました。しかし現実には『五〇年史』を手掛けるとなると、まず第一に過去の資料を探さなくてはなりません。古い先輩の本田氏や長いこと県の理事長として活躍した桑木理事長、川口では早くから参加したと思われる医師の宮岡氏、その他多くの先輩がすでに他界なされて、それらの方々が扱った古い各種の資料を極力探しても大部分が所在不明。ついに資料不足から『五十年史』の計画を放棄せざるを得なくなりました。川口市日中友好協会が創立して三〇年の月日が過ぎたころ、時の協会事務局長の要職にあつた

酒井君より、協会の『三〇年史』を作ってはどうかという提案がありました。しかし自分の能力からみて無理と考えられるので、無視してきたが、かつて多少なりとも波乱に満ちた生活を送って、戦後八年間留用された経験から、川口市日中の創立に多少なりとも最初から関与した者として、草稿を作らねば、「川口市日中の歴史」が途絶えてしまうのではないか、と思うようになりました。そこで、二〇〇四年春頃、意を決して作り始めたが、さて印刷されて世に出るとなると事実や年月日の確認、資料の保管や保管方法の不備から過去の出来事や往時の人名、明確な資料等探すのがいかに困難かを味わうことになりました。

「光陰箭の如し」「時間は絶対に待つてはくれない」『川口市日中の三〇年史』は遅々として進まない。だからといって放り出すわけにはいかない。牛歩どころか蝸牛の歩みのような速度で、ようやくここまできて編集委員会の貴重な意見や提言によって何とか格好がついてきました。栗原理事長や元酒井事務局長、現前田事務局長にはいろいろご指導をいただきましたことを、この場を借りて厚く御礼申し上げます。多くの会員の協力と努力によって立派なわが協会が創立されましたが文章が下手なので、それを言い表す事ができないのが残念であり、皆様に申し訳ないと心中深く感じておりますが、この『三〇年史』の上にさらなる立派な歴史を重ねてくださることを信じて、世に送り出しました。

二〇〇六年二月一日

川口市日本中国友好協会

副会長 坂本 隆太郎

川口市日本中国友好協会三〇年史

平成 18 年 2 月 1 日 印刷

平成 18 年 2 月 11 日 発行

編 著 者 坂本隆太郎

編集委員 栗原喜一郎 平山 安治 前田 稔夫 石塚 栄

内野 繁子 白井 允雄 市東 文子

発行所 川口市日本中国友好協会

〒333-0845 埼玉県川口市上青木西 1-20-3

産業文化会館 308 号室

TEL&FAX 084-253-2177

URL <http://www5.ocn.ne.jp/~k-jcfa>

印刷・製本 日新印刷株式会社

© 2006 Printed in Japan